新たな医療決済システムを考案するコンテスト開催、「医療保険・介護保険を超えた枠組みを」

PR m3.com 眼科グループ 2019年10月1日(火)

次世代の医療・患者決済システムはどのような形なのか――。広島大学医学部の学生や高校生が議論を繰り返し、新たなシステムを考案し、発表するコンテストが9月15日、広島県おりづるタワーにて開催された。

「プロジェクト・ラーニング・コンテスト(PLC)」と名付けられたこの催しは、広島大学大学院医系科学研究科 医療のためのテクノロジーとデザインシンキング寄附講座の一環として行われた。PLCは、広島大学医学部の学生だけでなく、薬学や経済学、情報学、デザインを専攻する大学生、そして広島市内の高校生の計15人が3チームに分かれ、1カ月半の期間をかけて議論を繰り返し、「次世代の医療患者決済システム」を考案することを目的としている。

寄附講座の教授を務める田淵仁志氏(ツカザキ病院眼科創業者主任部長)はコンテストの冒頭で、「アイデアは単なる始まりにすぎず、イノベーションは対話から生まれます。実社会の最小単位は個人ではなくチームです。この1カ月半、異なる大学、学部、年齢の方々とコミュニケーションを図ることでチーミングを学べたのではないかと思います。今日の発表を通じ、今後のステップアップにつなげてください」と語った。

各々のアイデアは、それぞれ20分間で発表された。また、広島大学病院長である木内良明氏をはじめ、広島県商工労働局医工連携推進プロジェクトチームの木坂智彦氏、ひろしま産業振興機構ひろしま医工連携推進センターの西川弘晃氏、株式会社Rist代表取締役社長の藤田亮氏、イーグロース株式会社代表取締役の今西勁峰氏など、産官学にまたがる方々が講評を行った。

ヘルスケアアプリから医療決済システムを改革

最初に発表を行ったチームはまず、医療機関がキャッシュレス決済の導入をためらう原因として、クレジットカード決済の手数料が約3%と高いためだと分析した。そこで彼らは、直接、医療機関のキャッシュレス化を推し進めるのではなく、まずは一般の人にアプローチし、その結果、医療機関に新たな決済システムを促そうという戦略を考えた。

それが、医療決済システムとヘルスケア/フィットネス機能を組み合わせたスマホアプリ「Mymedi」である。このアプリでは、ユーザーの身長・体重・食事・運動・睡眠のデータから、将来罹患する可能性の高い疾患のリスク予測を導き、ユーザーの将来を見通した健康レベルをスコア化する。さらに、この健康スコアに合致したクーポンやヘルスケア商品といった特典をユーザーごとに提供し、さらに、疾患リスクを下げるための適切な食事、運動、睡眠メニューを提示するという。

このアプリを通じて収集されたユーザーの行動履歴や健康状態のデータを健康食品メーカーや医療機関などに提供することで「Mymedi」は利益を得て、その収益をもとに決済システムの手数料をまかなうことで、医療機関のキャッシュレス決済の普及を図るというのだ。

このアプリを利用することで、患者はキャッシュレス決済の恩恵を受けるだけでなく、食生活などの改善によって生活習慣病患者が減り、結果的に、現在の医療費42兆円のうち、6.3兆円を削減できる見込みだと主張し、発表を締めくくった。

医療保険、介護保険を超えた枠組みを

二つ目のチームは、医師と患者の間にスムーズに入り込める決済システムがどのようなものかを探るために、一般人100人にアンケートを取り、また医療機関にフィールド調査を行った。その結果、スマホ決済のニーズはすでにある一方、医療機関が抱える課題は膨大な事務作業量にあると結論付けた。

この問題点の解決に向けたサービスとして、新たな電子カルテの開発が必要だという。この電子カルテによって既存の紙カルテで発生していた事務作業量を削減するだけでなく、患者も自分のカルテをクラウド経由で閲覧可能にする。そして、このアプリ内に診察券やクレジットカード情報を取り込むことで、病院―健康保険組合―患者の医療費管理をサポートし、会計の待ち時間の短縮につなげたいと提案した。

さらに彼らは、同様のスキームを活用することで、介護事業の改善の可能性も追求した。介護現場の肝となるのがケアマネジャーである。ケアマネジャーは、要介護者の区分を市町村に問い合わせ、ケアプランを作成するだけでなく、その要介護者を訪問介護にするのかデイサービスにするのかなどを細かく定める。これら全ての作業を管理するのがケアマネジャーであり、負担が大きいのだ。

この負担軽減のために、報告フォーマットの統一やクラウドプラットフォームでの文書管理のサポートなどを行うシステムを提供するという。そしてこれらのシステムの中に決済システムを組み込むことで、医療費および介護費をスムーズに会計できる可能性を示し、プレゼンを締めくくった。

「医療決済×TECH」から「医療×TECH」へ

最後のチームは、医療機関と患者、そして研究機関をつなぐ「STAG.inc」という構想を発表した。STAG.incが提供する決済システム「STAG pay」は、患者の口座と病院の口座が紐付いており、患者が受診し、診療報酬が確定すると、患者の口座から病院の口座に直接引き落としが行われる。また、このシステム上で次回の受診予約や薬局への処方箋情報の送信なども行えるようにする。

また彼らによると、STAG.inc.は決済システムだけでなく、医療の形そのものを変化させる潜在能力をもつという。それが「STAG system」である。このシステムでは、STAGサーバーに患者情報を蓄積し、患者には病院からの検査結果を分かりやすくして提示する一方、STAGで集まったビッグデータを研究開発機関に提供することで、創薬研究や医療デバイスの開発に役立てるという。そしてそのデータの使用料によって、決済手数料をまかなう予定だと主張した。

学生は想像を絶するほど優秀

講評者からは、「今の凝り固まった医療業界においてブレイクスルーを起こすためには、若い力が必要です。まだアイデアは荒削りで、実現可能性の低い部分もありますが、チャレンジングな取り組みを今後もぜひ続けていってほしいと思います」、「いきなり大きな絵をかいてもすぐに実現することはないので、少しずつ少しずつ作っていくことが重要です。自分のアイデアの一番のコアは何なのか、そしてどこのハードルをクリアすれば、事業分野を広げられるのかを突き詰めて考えるようにしてください」といった助言が寄せられた。

最後に田淵氏は、「このコンテストを通じて、学生は機会を与えれば必ず光り、想像を絶する優秀さがあるということを強く感じました。私たち人生の先輩が知識や経験を通じたアドバイスを提供する事で、若い人たちと一緒に社会を変えていきたいと思います」と述べ、イベントを締めくくった。

この記事の議論に参加する

関連カテゴリー

レポート　医師

参加募集中のAIラボプロジェクト

医療×AIセミナーシリーズ第9回「AI時代の医療とトラスト：日仏哲学対話」(2...

M3 Supported 2019年8月22日(木)

【締め切りました】医療×AIセミナーシリーズ第8回「医療者がゼロから学ぶ、AI...

M3 Supported 2019年7月25日(木)

【締め切りました】医療×AIセミナーシリーズ第7回「臨床現場を効率化するAI・...

M3 Supported 2019年6月20日(木)

【締め切りました】医療×AIセミナーシリーズ第6回 シンポジウム「医療AIの臨...

M3 Supported 2019年5月10日(金)

AIラボ プロジェクト一覧 ＞

関連する AIラボニュース

「AIは医師のサポートツール」医師がAI作り、使いこなすには？

NEW 2019年10月1日(火)

国内多施設でマンモグラフィAI開発、5年後に臨床応用へ－湘南記念病院乳がんセン...

NEW 2019年9月30日(月)

ブラックボックスから「理由の分かるAI」へ　―前田俊輔の「診断・治療支援AIの...

NEW 2019年9月30日(月)

医師がゼロからAI学ぶ「課題定義がすべて」－株式会社データック代表で医師の二宮...

2019年9月27日(金)

AIラボニュース一覧 ＞